

長蘆宗頤について

現存最古の清規である禪苑清規の編者長蘆宗頤は、樂邦文類の編者宗曉が蓮宗五祖の地位を彼に與えて以來淨土思想家としても著名である。然し彼の傳記・思想及び禪苑清規と百丈清規の關連等に就いては不明な點が少くない。とりわけ百丈清規と禪苑清規に關しては、禪苑清規卷四・卷七の念佛の規定だけを取り上げて、それが百丈清規に依據しているものか、それとも宗頤が淨土往生思想を有していたが爲のものか、或いは當時の社會不安から興つた念佛流行の風潮が叢林に迄侵透した結果なのか、興味ある問題である。この事に關しては、百丈清規の原型、百丈と淨土思想の關係等が究明されなければ斷定する譯にはいかない。本論はこれらの問題解明の一段階として宗頤に關し一、二不明な點を考究し、次に彼の禪思想と淨土思想の關係を考察せんとするものである。宗頤をめぐる問題點の第一は、諸文獻に散見される宗頤と云う名が、誤寫・誤植によるものか、誤寫・誤植とすればどちらが正しいのか、或いは別人であるのか、と云う問題であ

る。結論を先に述べると、これは「頤」が正しく、「頤」は誤寫或いは誤植であると判斷出来る。その第一の根據は、彼に關する資料中「頤」が壓倒的多數である事。就中禪系資料は「頤」で統一されている事。第二の根據は、資料の検討の結果得られたものである。即ち建中靖國續燈錄卷一八は「眞定府洪濟禪院宗頤禪師」として行李・法語を收録しているが、この目録は「宗頤」となっている。又觀無量壽佛經序（樂邦文類卷三）を見ると、大正藏所收のものは目録・本文共に「頤」としてはいるが淨土宗全書ではともに「頤」とし、更に已續藏では本文に「頤」としながら目録に「頤」としている。同様の事が樂邦文類卷三所收の蓮宗五大法師傳と蓮宗寶鑑卷四の彼の傳記にも見られる。以上は頤と頤が誤寫か誤植に起因するとの論據であるが、次に樂邦遺稿卷下に收録されている龍舒淨土文からの引用文を見ると、頤は頤の誤りである事が判明する。即ち大正藏・已續藏は「頤」としてはいるが、淨土宗全書は「頤」となっており、更に原典たる龍舒淨

近 藤 良 一

土文の該當箇所は、大正藏・淨土宗全書共に「蹟」となつて
いる事。以上の事を總合すると「蹟」は「蹟」の誤りである
と云えよう。

次に出生地についてである。淨土教系の諸先學は主に「襄
陽人」となしているが、これは恐らく蓮宗寶鑑卷四の記載に
據つていふと思はれる。しかしこの書は元代（一三〇五年）に
成立したものであり、又宗蹟に關する記述の多くは龍舒淨土
文、樂邦文類に依據しているのであるが、この襄陽出身説は
何に根據を求めたものか不明である。これに反して、彼の在
世時に成立し、従つて彼に關しては最も信頼すべき資料の一
つと云える建中靖國續燈錄は「洛州永年人」と記しており、
この記述の方が信頼できると云えよう。

以上宗蹟について不明な點を考究したのであるが、次に禪
者としての宗蹟・當時の叢林が「少林消息已足剋肉成瘡百丈
規繩可謂新條特地而況叢林蔓衍轉見不堪」（禪苑清規序）と慨
嘆して禪苑清規の如き綿密な清規を編纂した、或る意味では
當時の禪者として最も傑出せる者の一人とも云い得る宗蹟に
於て、淨土思想はどの様なものであり、又それは彼の禪思想
とどの様な關係に於て把握せねばならないのであろうか。

宗蹟の淨土思想は、他の禪系淨土并習者と比する場合特質
として取り上ぐるものはあまりないのであるが、稱名念佛の
勸稱、西方淨土と唯心淨土との一體化を特色として擧げ得よ

う。稱名念佛の勸稱については、勸念佛頌（樂邦文類卷五）を
作製した事、勸參禪人兼修淨土（龍舒淨土文卷十二）に「率大
海衆。各念阿彌陀佛。百聲千聲乃至萬聲。回向同緣願生彼
國」、念佛防退方便文（樂邦文類卷二）に「念阿彌陀佛。或百
聲千聲乃至萬聲。廻願往生西方淨土」等と述べている所から
窺えよう。この様に宗蹟は稱名を西方淨土往生の根本業因と
なしているのであるが、然し彼は唯心主義の立場から西方淨
土と唯心淨土とを一致させているのである。この事は勸念佛
頌に「極樂不離眞法界。彌陀即是自心王」と、觀無量壽佛經
序に「極樂雖遙豈離方寸。所以念佛而即得見佛。求生而遂能
往生」と云い、更に勸參禪人兼修淨土では「唯心淨土自性彌
陀。蓋解脫之要門」と述べている所から證せられる。所で宗
蹟の淨土往生禮讚は必然的に念佛の功德力の禮讚、淨土の多
樂である事の立證と結びつくのであつて、これ等は西方淨土
頌（樂邦文類卷五）、觀無量壽佛經序、勸參禪人兼修淨土等に
於て繰り返えし説かれていた。この様な念佛往生の稱揚は念
佛或いは淨土が最勝であるとの信仰が基盤となつていたので
あつて、勸參禪人兼修淨土に於て、衆人が娑婆に耽着して淨
土を願はない事について五惑を數え、結局淨土往生が「解脫
之要門。修行之捷徑」であると述べ、又「蓋有念佛三昧。還
源要術」であるとしるしているのである。

以上の如き淨土思想に對し、禪思想の特徴は、行持綿密と

禪定力の強調と云う點に存する。彼の行持が綿密であつた事は、禪苑清規と云う單に行持作法の嚴密な規定ばかりでなく、龜鏡文・自警文・百二十問など教誡とも云うべきものをも抱懷せる清規を編述している所から窺われるのであるが、その行持尊重は、禪定が諸修行中最尊なるもので、しかもそれは集團生活たる禪林に於て行わなければならない、との信念が裏付けとなつてゐるのである。禪苑清規坐禪儀の中で彼は云う。

「若得禪定其力最勝……坐禪乃安樂法門……夫禪定一門最爲急務若不安禪靜慮到這裏總須茫然……坐脫立亡須憑定力」と。この信念が「超凡越聖必假靜緣」或いは「（圓覺經云）無碍清淨慧皆依禪定」と云う理論的根據と相俟つて「一切時中常作方便護持定力」と定力の護持を強調し、かくする事が「幸禪復友三斯文自利利陀同成正覺」と衆僧にこの禪苑清規の護持を要請する事へと展開されてくるのである。かくの如く定力を最勝とし、言わば定力獲得の手段としての坐禪を強調する思想と上述した念佛を稱讃する言句とを比較する時、教化の對象の相違等の理由は擧げうるにしても、一見矛盾とも云得るものを内藏している如くであるが、この事は禪定と念佛とは共に解脱への道であるとの見解に基づくものと見る事ができる。念佛廻向發願文（樂邦文類卷二）に「以至誠心稱佛名號……臨命終時無諸障礙……身無痛苦心不顛倒身心安樂如入禪定」とある點、或いは念佛參禪求宗旨說（蓮宗寶鑑卷三）では「念

法雖二門、理同一致……是故念佛、參禪不礙念佛、佛不礙參禪參禪求宗旨、溪山雖異雲月是同」と述べている見解に基づくものと云えよう。然しながら宗頤が禪定と念佛とを全く同位に置き、それ等の關係を優劣なきものと見做していたかについては疑問が残る。その一つは彼の思想信仰の變化と云う點に存するのであつて、彼の禪に於ける思想・行實を最も良く表明している禪苑清規の編集は崇寧二年（一一〇三年）の事である。これに對して淨土思想を高揚する文獻の成立は、釋氏稽古略卷四等に據ると、元祐四年（一一〇八九年）に蓮華勝會を結んで普く道俗に念佛を勸進したとあり、從つてこの頃を中心に淨土を宣揚する文書が成立したのではなからうかと推測できるのである。又勸參禪人兼修淨土の一文が、樂邦文類にある如く蓮華勝會錄文が正しいのであるならば、この文の書かれたのも蓮華勝會を設立した時であると云えよう。こう見えてくると、一時は會下の衆僧にも淨土の兼修を勸進したが、後には念佛より禪の比重が大きくなつたと見る事が出来るのではないであらうか。管見では宗頤の事蹟に關して年代的に明かな資料が他に見當らないので、以上の事はあくまでも推論の域を出ない。疑問の第二は、淨土信仰を勸讃している文章中にさえ、念佛を禪の爲の方便としてゐる如き言句の存する事である。即ち勸參禪人兼修淨土に「以初心入道忍力未淳。須託淨緣以爲増上」と云い、その理由として初心入道者には

「諸魔境競作惱亂行人」するが「極樂世界大光明中決無魔事」としてゐる所から、定力を獲得するに至らない初心者には、魔境等を経験せず済む淨土信仰を奨励してゐると考えられる。又同文中に「修行緣具無若西方」と云い、更に禪苑清規卷四に「若非道眼精明竝勸令專念阿彌陀佛祈生淨土」と述べている點から考察すると、初機の者がある程度佛道修行に習熟する爲に、換言すれば「道高魔盛」(禪苑清規坐禪儀)な禪修行への入門の一方法として念佛を勸讀してゐるものと考えられるのである。

以上疑問の一、二を總合して考えると、宗蹟に於ける淨土思想は、參禪によるより高次の段階に到る一つの道程として把握するのが妥當であつて、究極的には禪苑清規に規定されている如き綿密なる行持を遵守する叢林に料て、坐禪による定力の獲得によつて、究極的安立に到達する事を求めていたと見る事ができるのではないであらうか。

以上の如く、宗蹟に於いて淨土思想は、禪思想と對等の地位を占めていたのではなく、念佛は禪定による高度の目標に到る一つの方法として用いられてゐるに過ぎない、とその間の關係を把握する事ができるのである。この點永明延壽で萬行中に禪も念佛も歸入せしめて、そのすべてを修したのとは根本的に異つてゐると云う事ができよう。

最後に百丈清規とも關連してくる事であるが、禪苑清規の

教思想家、就中天台系の淨土并習念佛の規定には、他の淨土者天竺尊式の影響が見受けられるようである。この事に關しては別の機會に論究したい。

1 彼に關する資料の代表的なものは次の如きものである。尚以下の論證に必要な書のみ出據を示す事とする。建中靖國續燈錄(記續二・乙・九・二)、嘉泰普燈錄、五燈會元、五燈嚴統、龍舒淨土文(大正四七、記續二・一二・四、淨全六)、樂邦文類(大正四七、記續二・一二・五、淨全六)、樂邦遺稿(同上)、廬山蓮宗寶鑑(大正四七、記續二・一三・一)、淨土聖賢錄、淨土指歸集、佛祖統記、釋氏稽古略、禪苑清規

2 宗蹟の生没は共に不明であるが、後に述べる如く禪苑清規は一一〇三年に成つてゐる。しかるに建中靖國續燈錄が成立したのは一一〇一年であるから、彼の在世中に成立したものである事は間違いないであらう。

3 稱名念佛の勸稱は、幻住清規の編者中峰明本にも見られる。

4 これは、永明延壽の思想の流れを汲むものと云える。

5 同文が樂邦文類卷二には蓮華勝會錄文として收録されてゐる。

6 大正四九・八七七b